

想定外の対応多かった

京大病院 大鶴医師 原発情報にも恐怖感

東日本大震災の発生翌日に災害派遣医療チームの一員として仙台市内に入り2日間活動した京都大病院初期診療・救急科の大鶴繁医師(38)＝写真＝は産経新聞の取材に応じ、「津波で大きな被害が出たので、外傷を中心とする災害時の救急医療も想定外のケースが多かった」と振り返った。

は13日午前にスタート。東北大病院(同市青葉区)で屋上のヘリポートに搬送されてきた被災者の受け入れ対応や診療などを行い、14日は仙台医療センターで診療に従事した。

大鶴医師は「災害派遣医療チームの本来の活動は、

なったという。

大鶴医師ら5人の京大病院チームは12日未明に救急

車で京都を出発。約18時間かかって宮城県での災害派遣医療チームの拠点となった国立病院機構仙台医療セ

ンター(仙台市宮城野区)に到着した。本格的な活動



大鶴医師(仙台市宮城野区)に到着した。本格的な活動

的元氣な人に大きく分けられ、外傷で生死の境にある人たちは思った以上に少なかった」と振り返った。

2日間で計約1200人の診療にあたったが、人工透析の患者や手術後で呼吸管理が必要な患者など想定外の対応も多かったという。

大鶴医師は自宅が兵庫県西宮市にあり、神戸大医学部3年だった平成7年1月に阪神大震災が発生。避難所でのボランティア活動が救急医療を志すきっかけとなったという。

今回の活動について大鶴医師は「原発の情報にはかなりの恐怖感を持った。被災地の人たちの恐怖感はいくら知れない。大規模災害時は正確な情報の伝達がとにかく重要であることを痛感する」と強調した。

東日本 大震災



被災地で活動する京都大病院DMATチーム
(14日、仙台市・仙台医療センター)＝同大学病院提供

京都大病院DMATの大鶴繁医師(37)は12日夜に仙台市に入り、ヘリで運ばれてくる患者に治療の優先順位を決めるトリアージに当たった。けがの程度などの情報が必要だが、患者の数が多すぎると、年齢や性別など簡単なメモが添付されている程度。ヘリから患者を降ろす間も次のヘリが上空で待機していた。

「現場は、生と死の明暗が鮮明に横たわっていた。」

「流されて行方不明か、生き残って頑張っている人かの二つに分かれていた」。現場は、生と死の明暗が鮮明に横たわっていた。

医療

生死の明暗目の当たり

京都第一赤十字病院の災害派遣医療チーム(DMAT)のリーダー高階謙一郎医師(50)

は13日夕、津波に襲われた宮城県石巻市の雄勝町地区に入った。病院の医薬品はすべて流されていた。警察や消防の姿もない。避難所を回ったが、外傷患者は少なかつた。「流

東京電力福島第一原発事故の影響で、治療拠点の周囲では放射線量測定が定期的に行われ、屋内退避の指示も出た。「何が起きているか分からない不安の中での活動だった」